

- 問1 九州にある特定の都市の産業別就業者割合を調査したところ、就業者全体の3分の1以上（約33.5%）が、製造業や建設業といった第2次産業に従事していることがわかりました。この都市の産業構造に見られる主な特徴として、最も適切な説明はどれですか。（2019年 佐賀県公立入試 類似）
- 大規模な自動車の組立工場や関連部品工場が集まって立地している。
 - 歴史的な建造物や自然景観を活かした観光業が、地域経済の基盤となっている。
 - 行政機関や商業施設が集積し、卸売業や小売業などの第3次産業が極めて盛んである。
 - 広大な平野を活用した米作りや施設園芸といった第1次産業が中心である。
- 問2 ある県の農業データとして、年平均降水量が2007.0mm、農業産出額が3512億円であり、そのうち果実の産出額が362億円、野菜の産出額が1248億円と、野菜の占める割合が非常に高くなっています。この県として該当するものを選びなさい。（2026年 徳島県公立入試 類似）
- 熊本県
 - 愛媛県
 - 長野県
 - 高知県
- 問3 九州地方南部の鹿児島県などに広く分布する、過去の巨大火山による噴火で発生した火砕流などの堆積物が積み重なって形成された台地を何といいますか。（2020年 静岡県公立入試 類似）
- シラス台地
 - 三角州
 - 扇状地
 - カルデラ
- 問4 鹿児島県の桜島周辺における降灰被害について、冬の2月には降灰が主に火口の南東方向（海側）へ広がるのに対し、夏の8月には火口の北西方向（鹿児島市街地側）へと広がることが統計的に示されています。このように、時期によって降灰の範囲が変化する要因として最も適切な説明はどれですか。（2020年 群馬県公立入試 類似）
- 周辺を流れる日本海流（黒潮）が、季節によって流路を大きく変えるため
 - 夏は気温が高いため、噴煙が上昇気流に乗って拡散されなくなるため
 - 季節風の影響により、季節ごとに卓越する風の向きが変化するため
 - 日本付近の上空を流れる偏西風が、季節によって完全に消滅するため
- 問5 九州地方には阿蘇山や桜島などの活火山が多く存在しますが、これらの火山活動による地下の熱を利用した発電方法を何といいますか。（2026年 和歌山県公立入試 類似）
- 火力発電
 - 水力発電
 - 原子力発電
 - 地熱発電
- 問6 2020年のブリ類の生産統計において、海面養殖業の収穫量が全国合計（約13万7千トン）の過半数を占めている九州地方の状況として、適切な説明を選びなさい。（2024年 大阪府公立入試 類似）
- 海面養殖業の収穫量上位5県はすべて太平洋側に位置しており、九州地方では宮崎県のみがその中に含まれている。
 - 九州地方は天然のブリ類を対象とした海面漁獲量が全国で最も多く、長崎県や島根県が全国の収穫量の過半数を占めている。
 - 海面養殖業よりも海面漁獲量の方が全国の生産量は多く、九州地方では養殖よりも北海道などから運ばれる天然ものの流通が中心である。
 - 鹿児島県が約4万3千トンと全国で最も多い収穫量を記録しており、大分県や宮崎県と合わせた九州3県で全国の過半数を占めている。
- 問7 九州地方南部の地形図において、標高の高い平坦な場所に「畑」や「茶畑」の地図記号が集中して見られる地域があります。この地域の土地利用の背景として、土壌の性質の観点から説明したものとして適切なものはどれですか。（2017年 滋賀県公立入試 類似）
- 水が地下に浸透しやすく水田としての利用が困難なため、畑作や畜産が行われている。
 - 海岸に近く塩害の影響を受けやすいため、塩分に強い農作物のみを栽培している。
 - 土壌に栄養分が極めて豊富であり、一度の作付けで多量の米が収穫できるため。
 - 標高が高く冷涼な気候であるため、寒さに強い果樹の栽培に特化している。
- 問8 鹿児島県などの南九州に広がるシラス台地では、一般的な地域の井戸が約6メートルから10メートル程度の深さであるのに対し、約64メートルもの深さがある「深井戸」が掘られてきました。このように極端に深い井戸が必要とされた理由として最も適切な説明はどれですか。（2024年 福井県公立入試 類似）
- 台風による塩害を防ぐため、海水の混入しない深層の真水を確保する必要があるため
 - 関東ローム層と呼ばれる粘土質の層が厚く、地表付近の水の浸透を妨げているため
 - 花こう岩の地層が地表近くまで迫っており、岩盤の隙間にあるわずかな水を確保するため
 - 地表を覆う火山噴出物の層が極めて水はけ良く、地下深くの帯水層まで掘り進める必要があるため
- 問9 沖縄県の地域調査において、本土復帰から現代までの経済統計について考察した次の記述のうち、正しいものはどれですか。（2018年 沖縄県公立入試 類似）
- 1972年と2014年を比較すると、県民総所得に占める基地関連収入の割合は約4分の1以下に低下しており、基地に依存しない経済への転換が進んでいる。
 - 復帰直後の沖縄県では基地関連収入が県民総所得の5.7%を占めるに過ぎなかったが、現在は基地の役割が増大し、その割合は30.4%に達している。
 - 県民総所得の総額は、1972年の約5,000億円から2014年の約4兆3,000億円へと増加しているが、基地関連収入の割合は依然として30%を超えている。
 - 基地関連収入の割合が大幅に低下したのは、県民総所得の総額が1972年時点よりも減少したためであり、沖縄経済の規模は縮小を続けている。
- 問10 東京都中央卸売市場におけるピーマンの月別出荷状況を見ると、1月から5月にかけては宮崎県や高知県からの出荷が市場の大半を占めていますが、夏場になると岩手県や茨城県からの出荷が増えるという対照的な構造になっています。宮崎県や高知県が、冬から春の時期に多くのピーマンを出荷できる背景として、最も適切な説明はどれですか。（2020年 大分県公立入試 類似）
- 冬の温暖な気候とビニールハウスを活用し、成長を早めて出荷時期をずらしているため
 - 夏の涼しい気候を活かし、本来の収穫時期よりも大幅に遅らせて出荷しているため
 - 広大な平野で機械化を進め、一年を通じて季節を問わず露地栽培を行っているため
 - 大消費地である東京までの輸送距離が短いため、冬場の寒さによる鮮度の低下を防げるため
- 問11 日本の4つの道県の農業統計において、農業産出額が約4,800億円と全国上位でありながら、米の産出額が占める割合がわずかに4.3%にとどまる県があります。この県における農業の特徴として正しいものはどれですか。（2022年 栃木県公立入試 類似）
- シラス台地などの地形を活かし、サツマイモや茶などの生産、および肉用牛や豚などの畜産が全国トップクラスの規模で行われている。
 - 気候が温暖な平野部で、冬の暖かさを利用して野菜を通常の時期より早く栽培する促成栽培が盛んに行われている。
 - 広大な平野を活用し、大型機械を用いた大規模な稲作が行われており、農業産出額の半分以上を米が占めている。
 - 都市近郊の立地を活かして、収穫から消費地までの輸送時間を短縮できるコマツナやホウレンソウなどの近郊農業が中心となっている。
- 問12 宮崎県では、沖合を流れる黒潮（日本海流）の影響を受けた温暖な気候を利用して、ピーマンなどの野菜栽培が盛んに行われています。このような農業の形態として最も適切な名称はどれですか。（2021年 東京都公立入試 類似）
- 近郊農業
 - 園芸農業
 - 酪農
 - 稲作